令和７年11月８日
講演者：阪口　由佳氏（五條市史編集委員会　文学文芸部会員、奈良女子大学　古代学・聖地学研究センター協力研究員）

☆万葉集とは

今に伝わっている中で最も古い和歌集であり、古い時期の日本語が留められている資料でもあります。1つのまとまったお話ではなく、4，500首以上の和歌が収められており、全部で20巻あるものです。

ここでみなさんにイメージしておいていただきたいのは、20巻ということは元々巻物であるということです。ペラペラとページをめくってお目当ての歌にたどりつくものではなくて、最初からクルクル回して開いていかないといけないものだということをイメージしておいていただきたいです。

万葉集はだいたい630年ごろから759年の歌までが載せられていまして、その頃は奈良県内に都がある時期でした。中国や朝鮮半島の影響を受けながら天皇中心の国づくりを進めていた時期に当たります。そのような時代の中で万葉集の元となるタネもつくられていったので、万葉集は奈良県を中心とした歌集と言えますし、奈良が生み出したものと言っても良いのではないかと思います。

奈良時代の文学の特徴としては、平仮名もカタカナもまだないということです。漢字ばっかりで書かれている時代なんですね。そこがまた面白いところになります。万葉集は半分以上が恋の歌なんですが、恋という字も「孤悲」など複数の文字が使われているように、様々な字が複数の漢字で書かれています。また、5・7・5・7・7の短歌より長い「長歌」という形式の歌も含まれています。

☆【宇智】 巻1・三～四

巻物をクルッとめくって、1つ目、2つ目の歌の続きに出てくるのが五條の宇智という地名です。万葉集の3、4番目の歌に五條の地名が出てきます。

（3番目の歌は）登場人物が3人いてややこしいんです。このときまだ14歳くらいの皇女が宇智の野へ狩りに出かけるお父さんの舒明天皇に贈る歌をつくりたいが、まだ幼いのでかわりに家来につくってもらった歌です。なので、実際の作者はお付きの人ですが、お姫様目線の歌になります。

朝の狩りや夕方の狩りに出かけられたであろう時刻に、お父さんが大事にしている弓のつなぎ目のところの音がします、という弓について歌った歌なのですが、その反歌である4番目の歌に「宇智の大野」の地名が出てきます。

「宇智の大野に馬を並べて朝の野を踏ませているのだろう」という意味の歌ですが、万葉集の前期では平野のことではなく山裾の傾斜地のことを野（の）と言っており、わざわざ都から離れて訪れる遠いところ、狩りの場所としてもよく出てきます。

万葉集の1番目と2番目の歌が天から見下ろすような視点で歌われているのに対して、3番目と4番目の歌は地上の中にいる姿ということで、天と地の対比を見ることができますし、1番2番は視るということが強調されているのに対し、3番4番は聴くということが注目されています。

☆【阿太】 巻10・二〇九六、巻11・二六九九

「阿太（阿田）」と言えばあの辺、というふうにお分かりの方も多いかと思いますが、一応（国土地理院の）地図を用意してきました。西阿田町、南阿田町、東阿田町、この辺り一帯が阿太ですね。大野新田町にも阿太峯神社があり、ここも阿太ということになります。阿陀比売神社があるこの辺り（原町）も阿太ですね。

では、この阿太がどんなふうに歌に出てくるかというと、またこの阿太も「野（の）」として出てきます。

巻10の二〇九六番、「秋雑歌　花を詠む」のうちのひとつです。葛というのは吉野葛とかのあの葛ですが、生命力が強くて1本2本生えているんじゃなくて、びっしりと生えるんですよね。（そんな生命力が強い）葛が生えている葛原で秋風がなびく、そうしたら葛は全然びくともしないけれども、阿太の大野に咲く繊細な萩の花はこんなに風が吹いたら散ってしまうなぁ、という風情のある歌です。

「野」が詠まれたかと思いますと、今度は「瀬」「川」が詠まれもします。巻11の二六九九番の歌です。「阿太に住んでいる人が、簗という魚を捕る仕掛けを渡している川の流れが速いよ、だから心ではあなたを想っているけど、流れにさえぎられて直接会いに行けないよ」という恋の歌です。なかなかあなたに会えません、あなたの家に通うのに大変なんですよね、という言い訳をするときの例えとして「阿太の吉野川の流れの速さ」が用いられています。

なお、この阿太の人が魚を捕まえる光景はこの歌だけではなくて、『古事記』の初代天皇（神武天皇）のところにも出てきます。

☆【荒木　浮田】 巻 7・一三四九、巻11・二八三九

五條市今井町に荒木神社があります。ここで2首が詠まれています。（1つ目は）巻7・一三四九の譬喩歌（ひゆか）、たとえの歌です。「こんなふうに私は年を取っていくのか、大荒木野に生えている篠（細い竹）でもないのに」という意味です。荒木という場所

も山裾の「野」であって、そこに竹が生えていて、それがすごく年を経たイメージがあるんですね。その大荒木野をイメージして、こんなふうに私も古びていってしまうのか、というように古びていくものの代表として大荒木野がイメージされて詠まれたということになります。

それと同じような意味の歌が巻11・二八三九にもあります。こちらも「こうして自分は老いていくのか、大荒木の浮田の杜のしめ縄でもないのに」という歌です。似ていますよね。元々はどっちかがどっちかを真似したのかなと考えられています。巻11は恋の歌ばかりなんですね。恋しく思っているのにあなたとの恋愛がうまくいかないまま、自分は老いていくのか…と恋の嘆きを歌っています。

このように、荒木神社の辺りが古くからの歴史ある場所と認識されていたことを物語っています。

☆【まつちやま】 巻 1・五四～五六、巻 3・二九八、巻 12・三一五四等

今からしばらくは「まつちやま」の話をさせていただきます。現在の奈良と和歌山の県境、昔でいうと大和国と紀伊国の境界にあるのが「まつちのやま」ということになります。この「まつちやま」を越えるか越えないかで大和にいるのかいないのか、ギリギリの場所ということになるんですね。そういう重要な場所なので、たくさんの歌が残されています。

最初にあげたのが、巻 1・五四～五六の3首です。701年に持統上皇が紀伊国に行かれたときの歌です。（1，3番目の歌は御所市に関連する歌のため、お話を割愛）

「まつちやま」を行ったり来たりいつも見ている紀伊の人がうらやましいなという意味の歌になります。「まつちやま」を行ったり来たりしているのは本人にとっては普通のことですよね。ただ通勤しているだけで何も素晴らしいことじゃないけど、旅人としてはどうにか安全に進みたいので、その土地（の神）を褒め称えているということになります。「まつちやま」が原文では「亦打山」と書かれていますが、これが（万葉集では）最も多く書かれている書き方となります。

巻 3・二九八、弁基という人の歌は、旅をしていて「まつちやま」を夕方に越えた、暗くてもう進めない、隅田（現和歌山県橋本市）の河原でひとり寝ることなのか、という意味の歌です。

巻12は恋の歌しか入っていない巻です。巻 12・三一五四は、さあわが馬よ、早く行ってくれ、「まつちやま」で僕を出迎えて待ってくれているあの子を、行って早く見たい、という男性の歌です。「まつちやま」は 2 人が再会するポイントであるとともに「待つ」という掛詞として技巧的な歌い方を導いているということになりますね。

続いて巻 12・三〇〇九の歌では、橡染めの衣（どんぐりで染めた庶民の茶色い衣）をほどいて洗って、またパンパンパンと打つという動作と「まつちやま」が掛けられています。そんな「まつちやま」のような妻には及ぶ人はいないなあ、古馴染みの妻が一番いいなあという意味の歌です。このように、今は「真土山」と表記される「まつちやま」ですが、「亦打（又打）」と書かれているイメージも万葉集では強いということなんですね。

次に巻4・五四三～五四五の長歌と短歌を載せています。巻4も恋の歌ばかりなんですが、この歌は恋の歌には珍しく非常に長い歌です。みなさんには（長くて）辛いとは思いますが、私が好きな歌ですので、紹介させていただきます。

724年、聖武天皇が和歌山に離宮をつくります。現在の和歌の浦を「明光浦（あかのうら）」と名付けるほど気に入りました。その時も、「まつちやま」を通っていったんですね。

天皇が行幸するとなると、もちろんひとりでは行きません。お連れの人がたくさん同行します。その人々のうちのひとりに対して女の人が歌をつくりたいと思い、笠朝臣金村という人に代作してもらった歌になります。今は紅葉の美しいシーズンですけれども、この行幸もちょうど今のような紅葉の時期でした。―夫は「まつちやま」で紅葉を見ながら、私のことなんか思い出すこともなく旅を楽しんでいるんでしょう、黙ってじっとはしていられないので、追いかけたいと千回思いましたが、か弱い女ですから関所を守っている人に「どこに行くんだ」と聞かれたときに返事するすべがなく、尻込みしてしまいました―という歌です。中心になっているのが「まつちやま」を越えて大和国から去ってしまう夫の姿ということになります。こんなに女性になりきって歌を作れる笠金村はすごいですよね。

（反歌2つは真土山に直接関連しない歌のため、お話を割愛）

次、巻6・一〇一九の歌、石上乙麻呂卿が土佐国に流された時にも「まつちやま」が歌の中に出てきます。石上乙麻呂はかよわい女に騙され、馬のように縄をかけられ、鹿のように弓矢で周りを取り囲まれながら、辺境の地に行ってしまった。「まつちやま」の方から帰って来ないものか、という意味です。「まつち」は「亦打」という衣をパンパンとまた打つという言葉を連想させるので、「古衣」が「まつちやま」の枕詞になっているのですが、ひょっとすると乙麻呂が帰ってくる頃には着ていた衣も古くなっているだろうというイメージも込められているかもしれません。

そして、「亦打」でない「まつちやま」の書き方もあります。巻7・一一九二では、「信土」と書かれています。白い布のように輝く「まつち」の山川（落合川か？）で、うちの馬が進まなくなってしまった、家で妻が行かないでと思っているからなのかなあという意味の歌です。ここでも「まつちやま」が大和国から出る際の、越えるか越えないかの境目として表現されています。

最後、巻9、後れたる人の歌二首です。後れたるとは「取り残された」の意味で、この場合家に置いて行かれたことを意味します。1首目は、和歌山の方へ行くあなたが、「まつちやま」を越える今日です、雨よ降らないでという意味の歌です。2首目はあとに残って私が恋しく思っている時、白雲のたなびく山をあなたは今日越えているでしょうかという意味の歌です。2首目の歌に地名は入っていないのですが、2首セットなので、「まつちやま」のことを2首目では「白雲のたなびく山」と言い換えたと考えられます。いずれも「まつちやま」を「越える」場面が歌われています。このように今は大和にいるのかいないのかということを重視されていたということが色んな歌からわかると思います。

☆【丹生】 巻 7・一一七三、巻 13・三二三二、巻 2・一三〇

丹生川は吉野川に注ぎ込むまで（吉野山地から）ずっと流れており、この丹生を詠んだ歌があるにはあるんですが、それが五條市の中かはわかりません。また、丹生は鉱物が出てくるところなので、1箇所に限らず群馬にも岐阜にも福井にもあります。万葉集で「丹生」の歌は5首ありますが、大和に関わる可能性がある歌のみ抜き出して載せました。（巻 7・一一七三は飛騨の歌とする説が有力であるため、お話を割愛。）

巻 13・三二三二は大和の丹生かと考えられています。斧を取って丹生の上流の檜の山で木を切ってそれを運んでいく、その中で吉野の滝は素晴らしく何度見ても見飽きないという意味の歌です。上流の黒滝辺りが檜の山と考えられているものです。

最後、巻 2・一三〇です。長皇子という天武天皇の皇子が弟（弓削皇子か？）に与えた歌1首。丹生の川の浅瀬を選ばず真っすぐに、恋しいあなた、さあ来てちょうだいという意味の歌です。これも具体的な場所は不明ですが、ひょっとしたら五條市の辺りの川が舞台かもしれません。

まとめとなりますが、万葉集から見る五條というのは、万葉集をめくって1巻ですぐ出てくるものです。万葉集を見る人は、50番（目の歌）が見たくても、必ず宇智の大野（現五條市）が目に触れます。

また、まだ人の手が入っていない自然豊かな地（野・川）としての五條のイメージが歌に表れています。さらに、真土山は大和の南の玄関口として、越えるか越えないかという点で紀伊への旅で最も重要なところであったことを紹介してまいりました。

私は万葉集というのは言葉の文化財と思っています。漢字は難しいですが、意外に今でもわかる言葉も多くありますし、誰かを恋しいと思う心などというのは今も昔も変わらないものです。これを機に万葉集のお気に入りの歌をひとつでも見つけていただければ有難いなと思います。

本日は以上です。ありがとうございました。